

伊藤 整 日本交壇史

頼唐派の
人たちの
11

講談社

日本文壇史 XI

◎伊藤 貞子 一九七二

昭和四十六年六月十六日 第一刷發行
昭和五十年八月四日 第二刷發行

著者 伊藤 整

發行者 野間 省一
東京都文京區音羽二一二・一二二
長野市西和田四七〇

印刷者 兒玉 幸男
長野市西和田四七〇

印刷所 信毎書籍印刷株式會社
(黒柳製本)

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽二一二・一二二

振替口座 東京三九三〇
電話 (045) 一一二一 (大代表)
郵便番號 一一二

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

定價は帯に表示してあります。

Printed in Japan

(文1)

目次

第一章

明治四十年、竹越三又と徳田秋江——西園寺總理を圍む一流文士の
集會の計畫——招待文士の人選——雨聲會開かる——雨聲會の反響

三

第二章

詩誌「白百合」と「白鳩」——野口米次郎の「あやめ草」——蒲原

三

有明と薄田泣菫の最盛期——早稻田詩社と詩草社

第三章

山岸荷葉と花袋——花袋と岡田美知代と永代靜雄——「蒲團」の成立——「蒲團」が「新小説」に發表される

三

第四章

藤村とその友人たち——「藝苑」の再興——「並木」のモデル——孤蝶と禿木との抗議——「水彩畫家」のモデル——丸山晚霞の抗議——「モデル」問題

四

第五章

漱石の「虞美人草」——中村星湖の「少年行」——高濱虚子の「風流懺法」——小川未明の「愁人」

三

第六章

正宗白鳥の「塵埃」——讀賣新聞社における白鳥——眞山青果の「南小泉村」——獨歩社の破産——獨歩の病氣と經濟的窮乏

九

第七章

獨歩社の破産以後——獨歩の病狀と「暴風」の休載——陸羯南の死

二〇

——網島梁川の死

第八章

..... 一四三

茅野蕭々の結婚——安倍能成と友人たち——野上彌生子の結婚——

岩波茂雄の結婚

第九章

..... 一四六

吉利支丹文化の研究熱——與謝野寛ら新詩社一行の九州旅行——九

州旅行の紀行文「五足の靴」——上田敏の洋行

第十章

少年時代の谷崎潤一郎——潤一郎の青春——志賀直哉の周邊——直
哉の青春——有島武郎の人となり——武郎の青春

一六七

讀者に

瀬沼茂樹

参考文献

索引

装幀構成 岡本芳雄

日本文壇史

——自然主義の勃興期

第一章

明治四十年、竹越三
士の集會の計畫——
會の反響

1

明治四十年の二月頃、「讀賣新聞」の主筆なる三又竹越與三郎は、新しい企畫を思ひついた。それは彼の親近してゐる總理大臣西園寺公望を中心として一流文士の集會を作る、といふことであつた。うまく拂れば、それはヨーロッパ流のアカデミーを日本に成立させることになるかも知れない、と彼は考へた。

竹越與三郎の考の起りは、尾崎紅葉の在社した時代のやうに、「讀賣新聞」に、一流の小説家を集めたいといふことであつた。前年の暮頃から、彼は東大講師である小説家の夏目漱石を「讀賣」の定期的執筆者にしようと努力したが、それは成功せず、夏目漱石は「朝日新聞」に入社することになるらしいといふ風評が流れてゐた。この會合が成功すれば、一漱石を招聘することよりも、も

つと大きな文學上の事件になると思はれた。

西園寺公望が他の日本の政治家たちと違ふところは、二十二歳から三十二歳までの十年間をフランスに暮して、ヨーロッパの文化を十分に吸収して歸つたといふことである。西園寺はフランス滞在中に、パリ・コンミューンの革命運動を見聞してゐた。また彼は、エミール・アユラスをはじめ、クレマンソーやガンベッタ等の政治家とも逢ひ、小説家ゴンクール兄弟とも交際してゐた。また當時二十歳臺の若い女流作家であつたルイズ・ジュディット・ゴーチエとも親交があり、日本の歌人の代表的な作品八十五首を、西園寺が佛譯し、ルイズが訂正して稿本を作つた。それは貫之、躬恒から實朝、景樹にいたる歌人たちの選集であつた。西園寺が日本に歸つて五年目の一八八五年（明治十八年）に、それは“*Poèmes de la Libellule*”（「蜻蛉詩集」）として出版された。その同じ年に、ピエール・ロティといふペンネームを持つたフランスの海軍大尉ジュリアン・ヴィヨールが、巡洋戦艦トリオンファントに乗つて日本を訪れ、長崎に一月あまり滞在した。その間ジュリアン・ヴィヨールは長崎でカネといふ名の女と同棲した。ピエール・ロティの“*Madame Chrysanthème*”（「お菊さん」）が出版されたのは、その二年後の一八八七年である。ルイズ・ゴーチエはテオフィル・ゴーチエの娘で、はじめ、詩人で劇作家のカチュール・マンデスと結婚して別れたが、その後、「お菊さん」、「日本の秋」等の著者なるピエール・ロティと結婚した。

竹越與三郎は、文士たちとの會合の計畫を西園寺のところへ持つて行き、西園寺の同意を得た。人選その他の細かいことは竹越に一任された。ある日竹越は「讀賣」の編輯室でそのことを持ち出し、その會には文士の中から誰と誰を呼んだらいいだらう、と雑談的に相談してみた。するとそこにある社員の一三名の中から「ヒーン、西園寺に呼ばれたつて誰が行くものか」と冷笑するやうな聲が出た。當時の新聞記者の多くは、自分を文士と同質の人間だと考へ、才能のあるものが文士となり、才能の足りないものや怠け者は記者をして暮してゐるといふ意識を持つてゐた。また官吏役人と違つて、貧乏をしながらも文士といふものは、政治家や官僚に媚び諂ふものではないといふ通念を持つてゐた。

その席にはゐなかつたが、この當時秋江徳田浩司が「讀賣新聞」に勤めてゐた。徳田浩司はこのとき數へ年三十一歳である。徳田は、この社に勤めて五年目になる白鳥正宗忠夫と、明治三十四年に早稻田大學を同時に卒業した。二人は在學中から交際があり、當時島村抱月が社會部長として入つてゐた「讀賣新聞」に小説月評の筆を取ることで、二人はともに著作といふものを始めたのであつた。同じ岡山縣出身で三歳ちがひの二人は一面で親しく交はり、一面で反撥し合つてゐた。早稻田大學卒業の直後に正宗は大學附屬の出版部に月給十五圓で勤めてゐた。徳田の方は博文館に入り、田山花袋の下で「中學世界」の編輯助手をしてゐたが、半年ほど経つと、徳田はそこをやめ、

月給二十圓で早稻田大學出版部へ入つて來た。

正宗の方は主任であるにかかはらず、徳田より月給が安かつた。その上、徳田はまともに仕事を
する氣の全くない怠け者で、校正その他の事務を全部正宗に押しつけ、自分の知つてゐる文壇人の
噂話などをしてゐるかと思ふと、すぐどこかへ出て行つてしまふといふ風であつた。こんな男と一
緒に仕事するのはたまらぬと考へて、正宗は一年足らずで出版部をやめ、翻譯をしたり少年物語を
書いたりして一年を過ごした後に、明治三十六年に「讀賣新聞」に入つたのであつた。

徳田秋江の方は、何をやつても厭つぽく長續きしない性格であつた。彼は早稻田の出版部もや
め、原稿が賣れるでもなく、放浪同様の生活をつづけてゐた。その徳田が、明治三十七年に數へ年
二十九歳のとき、「中央公論」の編輯主任となつた。その當時「中央公論」は廢刊の危機にあつた。

「中央公論」はもと「反省會雜誌」と言つて、禁酒道德を標榜して西本願寺法主の大谷光尊が明治
二十年八月に京都で創刊したものである。明治二十五年、この雑誌は「反省雜誌」と名を改め、東
京に發行所を移した。編集主任は西本願寺系の學者として名のあつた櫻井義肇が當り、庶務主任が
麻田駒之助であつた。高楠順次郎、高島米峰等が主要な執筆家であつた。その頃この雑誌は、佛教
系の修養雑誌として、キリスト教系の内村鑑三の「聖書之研究」と對立してゐたが、當時は外に評
論雑誌として徳富蘇峰の「國民之友」、博文館の「太陽」、三宅雪嶺等の「日本人」、竹越與三郎の

「世界之日本」等があつた。その中で佛教系修養雜誌といふ限定された立場の「反省雜誌」は微力なものであり、その發行部數も千五百乃至二千部であつた。

明治三十二年一月、この雜誌は綜合雜誌としての再出發を企て「中央公論」と改題した。明治三十六年になつて、編輯主任の櫻井義肇は西本願寺當局と衝突し、「中央公論」を脱退し、翌三十七年の一月から獨力で綜合雜誌「新公論」をはじめ、「中央公論」は半年で征服して見せると豪語してゐた。高島米峰、杉村楚人冠等の有力執筆家は「新公論」に移つた。これまで營業主任であつた麻田駒之助は、編輯方面に自信がなく、苦境に陥り、秋江徳田浩司を起用したのであつた。

徳田秋江は、二十年も續いた歴史のある雜誌の編輯主任になつたものの、麻田駒之助が小説類を載せることを厭がつたので、編輯は思ふやうにならなかつた。しかし秋江は少年時代から政治に關心があり、この評論雜誌の仕事に別な意味で熱中した。彼は編輯所を小石川區小日向臺町の自宅に移し、數へ年二十二歳の東京帝大文科大學の學生瀧田哲太郎を助手として仕事に當つた。秋江はこの編輯主任の仕事を半年ほど續けたが、一萬部も刷つてゐると言はれた「新公論」に壓倒され、散々な不成績を残したまま辭任した。そのあとに主任になつたのが高山覺威である。高山がこの雜誌を引き受けたとき、その印刷部數は千部、そのうち三百部が寄贈、三百部が賣れ、四百部は返品として本郷區西片町十番地の中央公論社の玄關へ積み上げられるといふ状態であつた。

高山は瀧田の助力を得て社運を恢復することに努力した。小説を載せるやうに麻田を説得したのが彼の最も大きな功績であつた。それから後瀧田は十分に活躍できるやうになつたのである。明治三十八年頃から漱石、鏡花、露伴、春葉等の執筆を得て、次第にこの雑誌は文學好きな讀者の間に迎へられるやうになつた。

明治三十九年の一月、新歸朝の島村抱月が「早稻田文學」を再刊すると、徳田秋江はその編輯を助け、島村抱月のもとにあつて働いた。だがそれと同時に彼は、友人の正宗白鳥が主任をしてゐる「讀賣新聞」の毎月曜日の「文藝附録」に、雜文を書いて小遣稼ぎをしてゐた。明治四十年の二月頃徳田秋江は「早稻田文學」編輯部を一年あまりでやめると、その縁で「讀賣新聞」に入社した。正宗忠夫は、またしても、遊び相手としては面白いが一緒に働きたくはないと思つてゐたこの友人を同じ社に迎へねばならなくなつた。

秋江徳田浩司は、無愛想でぶつきらばうな正宗忠夫と違つて、口が軽く、人好きのするところがあつた。西園寺侯爵中心の文士の會の案を持ち出して社員の間にはしい反響を得なかつた竹越與三郎は、この徳田を主筆室に招いてその話をした。

「西園寺が御馳走をして、文學者を呼ぶといふから、誰がいいか、君考へて名前を書き出して下さい」と言はれたとき、徳田はすぐ、それは面白い事だから考へてみませう、と言つた。彼はその計

畫に熱中し、家へ歸つて机に向ひ、文學者の名前を紙に書きながら、組み合わせや釣合を色々に考へてみた。徳田浩司は氣まぐれな男だと皆に思はれてゐたが、彼は本當に自分の氣に入つた仕事以外は何もしたくない人間であつた。そしてこの仕事は彼の氣に入つたのである。とにかく、當代の最もすぐれた文士二十名を選び出すといふのは、言はば帝國議事堂の設計を委された建築技師のやうなものだ。採用されるか否かは別として、自分の納得できる人を選び出してみようと彼は本氣で考へた。

彼は二つの案を作つた。一つは三宅雪嶺、徳富蘇峰、森鷗外、坪内逍遙といふやうな硬派の文筆家又は學者を主にした二十數名の一群で、その中には徳富蘆花、上田敏、島村抱月等も含まれてゐた。政治家西園寺公望の招待したいと思ふのは、さういふ型の學者風の文學者かも知れないからであつた。更に彼はもう一つの案として、純作家又は文壇的作家のリストを作つた。それには前のリストと重複する人も含まれてゐた。

それは、坪内逍遙、森鷗外、幸田露伴、島村抱月、徳富蘆花、上田敏、巖谷小波、内田魯庵、廣津柳浪、川上眉山、夏目漱石、二葉亭四迷、後藤宙外、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉、小杉天外、徳田秋聲、國木田獨步、島崎藤村、田山花袋等であつた。

徳田浩司は、多くの古い、又は著名な文士を切り棄てた。即ち唯一の江戸戯作者の風格を傳へる